

二〇二五年度 群馬大学共同教育学部 学校推薦型選抜問題
国語専攻

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 問題用紙は表紙を含め3枚、解答用紙は1枚、下書用紙は1枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮
明の箇所があつた場合には申し出てください。
3. 受験番号と氏名は解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題用紙と下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

現代においては「待つ」という時間に対して、誰もが不寛容になっていると思われる。そう言う私自身がそうなのである。

東京の山手線はすごいと思う。ほとんど5分と間隔をあけずに、次の電車がやってくる。朝のラッシュ時など、どの駅にも1台ずつ電車が停まっているのではないかと思うほどである。あの長距離を走る新幹線でも、多い時間帯は10分と間隔が空いていない。私たちは、そんな待ち時間に慣れてきてしまった。

かつては、バス停で10分や15分待つのは普通のことであつたが、この頃の京都の市バスなどは、次のバスがどこまで来ているかを表示してくれる。ありがたいことだが、乗客が待つという時間に対して、耐える力が減退しているということの証左とも言えよう。

待つというストレスから解放され、便利になったのだから文句を言う筋合いはないのだが、ちよつと待てよと思わなくもない。それは情報を得るスピードに関してである。近年、私たちのまわりで、もつとも大きく変わったのがインターネットの普及であることはまちがいないだろう。インターネット環境が激変し、コンピュータからだけでなく、スマホからも簡単にアクセスでき、私たちは、どこにいてもインターネットにつながっている。

インターネットの普及によつて、必要な情報が、とにかくすぐ手にはいるようになった。ある一つの言葉を調べるために、分厚い辞書を本棚から持ちだしてきて、そのページをめくるといふような面倒な手続きを経ることなく、目的とする単語にネットはすぐさま接続してくれる。ある事件を調べるために、図書館に行つて、関係資料を持ちだすという手間をかけなくとも、ネットの情報でアウトラインを掴むことは、ほとんどの場合可能になっている。

いまや情報や知識を得るために必要な時間と手間は、ネット普及前に較べて、比較にならないほどに少なくなっている。まことに手軽になり、高い辞書を買うことも、図書館まで調べに行くことも、ほとんど必要ないまでに手軽になってしまった。

これを駄目だと言う自信は、私にはない。ないが、それでいいのかとも思う。

私が危惧を感じるのは、まず第一に、「知」があまりにも手軽に手に入るといふ状況は、これからの私たちの「知」へのリスペクト（尊敬）の念に、大きな変更を迫ることになるだろうといふことである。諸橋轍次もろはしつぐじの『大漢和辞典』を引くとき、新村出しんむらいうしでるの『広辞苑』を引くとき、その行間に、私たちははつきりとは意識しないまでも、これを営々とした努力の末に完成させた人（あるいは人々）の存在を、かすかに感じているはずである。その恩恵を蒙こうむっているという意識は、それが必ずしも感謝にはつながらないまでもどこかで感じているだろう。

あつけなく情報が入ってくるネットでは、そして誰がそれを書いたのかがはっきりしないような説明文からは、そのような「知への尊敬」の念はほとんど湧いてこないというのが実感である。

「知」というものがなんとなく入ってくるという前提からは、「知」の開拓のために自らの人生を賭けてみようなどという若者が生れるとは考えにくい。

いま一つの問題と私が考えるのは、「知」へのアクセスの直截性^{ちやくせつ}である。グーグルにせよ、ヤフーにせよ、検索エンジンはまことに見事に、知りたいと思う情報に私たちを直接導いてくれる。時間の無駄もなく、まことに効率的である。

しかし、この「知」への着地の仕方には、実はなんのおもしろみもないと、私などは思うのである。本が欲しい。本屋へ行つて、なかなか見つからない一冊の本を探す。図書館でも同じであろう。そんなとき、探しているのとは違うものだが、背表紙を見ていてとても興味を引かれて、思わず買ってしまったなどという経験は、多くの人にあつたはずだ。

この犬も歩けば棒に当たる式の、偶然の出会いという形での「知」への遭遇は、ネット環境下では、まず起こり得ないものだろう。一直線に、いま求めている情報へと私たちを導いてくれる。アマゾンで本を注文すれば、欲しい本だけが見える仕組みになっている。意識の外側にあつて、普段は現れてこないのだけでも、背表紙を見ていて不意に自分の別の興味に火がつくといった形での、「知」へのアクセスの仕方、実は読書や調べものの楽しみは、こんな思わず入った横道での出会いにこそあるのかもしれないと、私は思っている。

「待つ」という時間に耐えられないで為す知識や情報へのアクセスは、効率的ではあるうが、幅ということからはきわめて限定的と言わざるをえない。読書の豊かさといったものは、そんな寄り道にこそあるのだから。

出典：永田和宏『知の体力』新潮新書、二〇一八年 一九六—一九九頁

問 傍線部について、筆者の見解を踏まえた上で、あなたの考えを述べなさい。(六〇〇字以内)